平成 25 年 7 月 16 日
九州大学法学部３年
古屋 雄貴

国際世界遺産ユースフォーラム 2013 参加報告書

１．はじめに

この度、私は機会に恵まれて平成２５年６月８日（土）～６月１６日（日）の間、カンボジアのシェムリアップとプノンペンで開催される「国際世界遺産ユースフォーラム」に日本のユースとして参加する運びとなった。以下はこのユースフォーラムの概要、私がこのフォーラムで何を行ったか、そしてフォーラムで何を学び、何を日本のユース世代に伝えたいと感じたか等について、稚拙な文章ながら報告させて頂く。

２．フォーラムの概要

日程

平成 25 年 6 月 8 日～平成 25 年 6 月 17 日
内 6 月 8 日～6 月 15 日はシェムリアップ
6 月 16 日～6 月 17 日はプノンペンにて開催

スケジュール

添付の”Detailed Programme”を参照

参加者

International participants 16 名（名簿中、中国からの参加者は体調不良により不参加）
Cambodian participants 20 名
計 36 名

※詳細は添付の”Youth Participants”を参照

テーマ

Living with Heritage: Temple, Environment and People（T.E.P）

３．フォーラムでの経験

毎年異なるテーマを設定して行われるこのユースフォーラムであるが、今回のテーマは”Living with Heritage: Temple, Environment and People（T.E.P）”であった。つまり我々ユースが、いかに遺産と共存していけば良いかについて様々な観点から学ぶことが、このフォーラムの私達への大きな期待であった。カンボジアが世界に誇る遺産であるアンコール・ワット遺跡群を実際の例に取り、現在どのように人々がそれと共存しているかを学び、そして最終的に我々ユースが世界遺産との共存を実現するためには何をすれば良いのかをユース・ステイトメントに纏めるという流れである。上記の Detailed Programme を確認して頂ければ、実際のフォーラムの具体的な流れがより掴みやすくなるだろう。まず、始めの２日間を使って所謂 classroom lecture を行い、様々な前提知識を吸収する。そして続く３日間で、そのレクチャーで得た知識をもとに実際に Site Visit を行い、現在どのような保全活動が行われており、そしてどのようにして現地のコミュニティが遺産と共存しているのか、等について自らの肌を通して直接学ぶ。以下はそれぞれの活動の概要、そしてそれらを通して私がどのような経験を得ることが出来たかについて詳述していく。

Classroom Lecture

最初の２日間を使って教室で行われたレクチャーでは、各分野の専門家により、様々なトピックに関しての講義が行われた。具体的には”Angkor Civilization”, “Water Management”, “Heritage Education and Community Projects”といった多岐にわたる内容であり、いずれのトピックも我々がこれから世界遺産に関わっていくための基礎的な知識の獲得を目指していたように思える。私を含め、いずれの国から来ていた学生も、フォーラム参加以前に事前学習を進めていたようで、レクチャーを落ち着いた様子で頷きながら聞いていた。そして、何か分からないことがあればそれぞれのレクチャーの後に取られる質疑応答の時間を使って積極的に質問を行なっていた。あまりにも質疑応答が盛り上がり過ぎてレクチャー自体の時間よりも、質疑の時間が長くなってしまうことも間々あった。特にカンボジアからの参加者は建築学や、考古学専攻の学生が多かった為か、世界遺産に関して深い造詣を持っており、質疑応答を終えても自分がよく理解できなかった部分などを、レクチャーが終わった後に詳しく解説してもらった。これらのレクチャーを通して、これから控える Site Visit を前に基礎的な知識を参加者全員で共有することが出来、これによって Site Visit がより有意義なものになったように思える。

Site Visit

上記のレクチャーに続く３日間で、実際に Site Visit としてアンコール遺跡群の Temple of Bayon や、かの有名な Angkor Wat、そしてアンコール遺跡群の位置する Siem Reap の街や村を訪れた。当初予定した日程に Angkor Wat への入場許可がおりずに日程変更を余儀なくされるなどのトラブルがあったものの、関係者の尽力により予定されていた Site

Visit を全て完了することが出来た。Site Visit では、事前のレクチャーで得た知識をもとに、どのような活動が実際に行われているのかを自身の目で確認することが出来た。単に教室の机の上で得る知識と、実際に自分の肌を通して得る知識には大きな差があることは自明のことであろう。生身の経験を得ることにより、自分の中で問題がより現実的なものになり、より現実的な解決策を考えることが出来るようになる。机上の空論とはよく言ったもので、この生身の経験が無ければ、問題を自分のものとして考えることは困難である。この生身の経験があってこその、今回のユース・ステイトメントであり、何よりこれがなければこのステイトメントも説得力に欠けるものになっていただろう。

Work Shop & Other Activities

Classroom Lecture の日も Site Visit の日も、１日の活動終了後に６人程度の小グループに分けられ、その中でグループディスカッションが行われた。ディスカッションでは、予め２つの質問が用意されており、その質問に対する答えをそれぞれの参加者が発表する形で話し合いが進められた。この作業は、その日に学んだことを頭のなかで整理し、皆で共通理解を作るために非常に役立った。６人の小グループでのディスカッションが終われば、再び大きな教室に集合し、小グループから選出された代表者が全員の前で、グループで話し合った内容を要約してプレゼンする。これにより、各グループで話し合われた内容がユース全員で共有され、最終的なステイトメント作成の際に非常に役立つこととなった。

また、時系列が前後するが、フォーラムの２日目には、各国参加者により自国の遺産に関するプレゼンテーションが行われた。参加者達が事前にプレゼン資料を用意し、自国の遺産の概要や、それを取り巻く諸問題、そして現在行われている保全活動等に関して、それぞれ１０分強でプレゼンが行われた。どの参加者も準備と事前学習をしっかりとしており、内容的に非常に充実したプレゼンが多かった。また、中には事前に動画を作成して、プレゼンの中に織り込む等、形式面においても視聴者を惹きつけるための努力が多くなされていた。それぞれのプレゼンの後には、５分程度の質疑応答の時間が設けられ、様々な質問がプレゼンテーターにぶつけられた。スケジュールがタイトに組まれていた為、プレゼンと質疑応答の時間に制限があり、プレゼンの途中で強制的に終了させられるなど、時間に関する若干の不満があったものの、内容面でも形式面でも総じて満足の行くものだったように思える。

４．フォーラムへの要望と提案

今回のフォーラムは、カンボジアを含めて世界１７カ国からユースの参加があった。アジアを中心にヨーロッパや中米、そしてロシアや中東といった世界のあらゆる国からの参加があったことは有意義なフォーラムの達成に大きく寄与したものと思われる。世界中から参加者が集まったのは良いが、アフリカからの参加がないことにやはり少し違和感があ

った。アフリカにも数多くの世界遺産が存在するわけであって、アフリカからの参加者が一人でもいれば、多様性という面で、より有意義なフォーラムになったことだろう。

また、今回のフォーラムでは、各国参加者が自国の遺産をアピールする機会が少なかったように感じた。確かに、フォーラムの２日目に各国参加者によるプレゼンテーションの時間が設けられてはいたが、参加者が多かったせいか、時間とスケジュールに追われたものになり、満足のいくプレゼンと質疑応答が実施出来ていなかったように思える。スケジュールを変更して、より多くの時間をプレゼンに割くか、プレゼンとは異なった方法で各国参加者が自国の遺産をアピール出来るチャンスを設ける必要があるように感じた。

５．ユースによるコミットメントへの期待

今回このフォーラムに参加して、世界遺産について学ぶ意欲のある学生が世界中に数多く存在することを強く実感することが出来た。どこの国の参加者に聞いても、国内で事前に何かしらの選考があり、「厳しい選考をくぐり抜けて、自分はこのフォーラムに参加している」、という自負のようなものが感じられた。日本国内にも世界遺産に関して学ぶ意欲のあるユース達は数多く存在することだろう。そういったユース達に対して、よりオープンでオフィシャルなイベントを開催するのが、ユース世代によるコミットメント活性化への一番の近道でないかと私は考える。つまり、今回のユースフォーラムのように、世界遺産に関して学んでいる学生に対して、これまで自分たちが学んできたことや、考えていることを発信し、共有する場をもっと多く提供することが重要なのではないだろうか。その場として、日本ユネスコ国内委員会が何かしらのイベントを開催するのが望ましいように思える。しかし、そのイベントが閉塞的なものであっては参加者が限られてしまうし、フランク過ぎてお遊びに近いものになってしまっても、開催の意味が薄くなってしまう。こういった意味で、今回のユースフォーラムには参考にすべき部分が多かったように思える。すなわち、事前の参加募集がある点で、決して閉鎖的なものではなかったし、また、ユースでありながら、自国の代表であるという一定程度の緊張感があることによって、お遊び感覚になることもなかった。

そこで、私の提案として、日本ユネスコ国内委員会主催で今回のユースフォーラムのようなイベントを国内で開催してみてはどうだろうか。各地方で代表を数名選出（例えば、関東ブロック代表や、九州ブロック代表といった風に・・・）し、Classroom Lecture や Site Visit を行い、それらに加えて何かしらの Competition を行なっても面白いかもしれない。テーマは国内の世界遺産であっても、全世界の世界遺産であってもよい。とにかく、ユース世代が興味を持って、自発的に参加してくるように仕向けるのが最も重要なことだろう。このようなイベントを通してユース世代が世界遺産に関する活動により知識を深め、ユース同士で様々なコミュニティを作り上げ、そして知識を共有することが出来る。これは将来的なユネスコの活動に大きく寄与することになるように思える。

６．おわりに

今回のフォーラムに参加したことによって、非常に有意義な経験を得ることが出来た。今まで、自分とは関係の無いものと考えていた世界遺産とそれを取り巻く問題を、フォーラムへの参加や、事前の学習を通して、より自分自身に近づけて考えることが出来るようになった。今や、世界遺産が自分とは関係の無いものとは言えない。この報告書を通して、今回の参加で私が得た経験を、少しでも日本のユース世代に発信することが出来たら幸いである。またこれからも、このフォーラムに日本から唯一参加したユースとして、同世代の若者や、世界遺産に関係する多くの人々に自らの考えと経験を発信し続けていくことを目指す。最後に、フォーラムへの参加の為に尽力して下さった文科省の中馬様、私を代表として推薦して下さった河野先生、そしてこのフォーラム開催にかかる多くの関係者の皆様に御礼を申し上げて、この報告書の結びとさせて頂く。